



町内会短信 3月号

弥生

2022年3月1日

川沿中央第一町内会長

柴田田鶴子

町内会の皆様、北国の長い冬が終わり、花が咲き、鳥が鳴く弥生3月。やっと春ですね!! と華やきたいところではありますが、今冬は歴史上かつてない程の豪雪に見舞われ、ホワイトアウトに依る様々な事故も発生し、今は訪れた春に浮かれきれない私達ではあります。

終末の見えないオミクロン株に依る、コロナの第6波の到来(2/27 現在 市中感染者1,338人 死者6人 クラスタ3ヶ所)、皆が待ち望むワクチン3回目接種の遅延、そして仲々降り止まぬ雪の除雪作業と、特に高齢者の方々は息も絶え絶え、2/15 開始予定だった市とのパートナーシップ除排雪を待ち望んでいらした方々も多かったと思います。それも度重なる連続大雪で、排雪日程が大幅に遅れて更に皆様にご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした。

お詫びの言葉を考えているうちに2月20日夜に閉幕した北京五輪での我が国の獲得したメダル数を数え終わるかどうかに2月24日にはプーチン大統領の「ウクライナ侵攻の始まり」認定演説があり、翌25日には新聞一面にロシア、ウクライナ侵攻の文字が踊りました。26日夜のニュース番組に、ウクライナ在住の幼女が涙ながらに「死にたくない、戦争はイヤ」と訴えた姿が報道されました。同じ年頃の我が孫との姿がダブリ、余の悲惨さに涙がとめどなく流れました。つい最近もミャンマーの軍事クーデター、アフガニスタンからアメリカ軍撤退後のイスラム国の占有と、民間人が犠牲になる悲惨な紛争があちこちで起きています。

ロシアやウクライナは日本から遠いから関係ないと思う方々もいらっしゃると思いますが、大違いです。ロシア・ウクライナの小麦生産量は世界の中で25%も占めています。また、天然ガスや石油の埋蔵量も世界でトップクラスで、国際価格に多大な影響を及ぼしています。ロシアがウクライナへ侵攻したニュースが伝わったイタリアではスーパーに客が押し寄せ、小麦粉、パスタ、パン等が品切れ続出と報じられています。ガス代も昨年の4倍にも高騰したそうです。

「コロナ禍」の2年間を振り返ると、町内会短信のニュースには余り明るい話題に繋がるものが少なく、それ故にこそ筆者は、日本が存在するこの地球という星にかかる暗雲を振り払いながら個々人には出来るだけ前向き思考で、小さな喜びを見つけながら生活する力となれたらと願ってきました。

初めに触れたように、2月27日付けの新聞では札幌の市中感染者1,338人 死者6人 クラスタ3件という数字がカウントされています。願わくば、現在全国平均35%という3回目ワクチン接種率が少しでも上がりますように…。そして日本古来の民俗信仰の最たるものである「八百万(やおほむす)の神々」に、この国の安全と平和 延(ひ)いては地球全体の安全と平和を祈願するしかないのかなと思います。お賽銭は少しはずんで……、その分家族の食費とアルコール費を切り詰めて……。

2月の町内会活動報告	2月20日(日) 4 役会議(会長・副会長・総務・会計) 15:00～ 於 地区センター (オミクロン株感染者増加の為、役員会は中止)
3月の町内会活動予定	3月13日(日) 部長以上役員会 10:30～於 地区センター 今年度の反省、決算書審議、来年度の行事予定作成、予算案審議

裏面へ →

郷土史より(視野を広げて) —北の先駆者・近藤重蔵(3)

郷土歴史家 吉田邦行



◎ 第二次探検 寛政11年(1799)3月20日～寛政12年12月12日

江戸—松前—襟裳—厚岸—根室—国後島—択捉島—江戸

この探検における重蔵の業績は、次の通りである。

1 箱館港に拠点を置いて活躍する商人・高田屋嘉兵衛に依頼して、択捉島までの安全な航路を開拓させた。

2 高田屋嘉兵衛の協力を得て生活物資、資材を運び込み17の漁場を開いた。島での生産物は、信頼できる嘉兵衛に一括運搬、取引させた。

3 アイヌ民に漁法を教え、労役や生産に応じて物資を公平に分配させた。その結果、生活が豊かになり択捉島にアイヌ民が増え活気づいた。

◎ 第三次探検 享和元年(1801)2月24日～11月27日

江戸—東海岸—国後島—択捉島—江戸

高田屋嘉兵衛と再会。国後・択捉島の状況を視察。

その後、江戸に戻った重蔵は、蝦夷地御用掛専任を命じられる。

◎ 第四次探検 享和2年(1802)4月5日～12月15日

江戸—東蝦夷地—択捉島—江戸

今回の使命は、得撫島(うるっぷとう)まで来ていたロシア人と、択捉島のアイヌの人々の交易を防ぐこと。そして日本の領土として、択捉島のアイヌの人々に対して同化政策を進めることであった。

帰府した重蔵は、一連の功績に対して幕府から旗本に任じられる。通常の務めは小普請方(こぶしんかた・小規模の移築工事を業務)の役職であった。しかし、心は常に蝦夷地にあり「西蝦夷土地処分方、並びに取り締まりに関する建言」や、地誌書の「辺要分解図考」8巻を書いて幕府に献上した。その他にも「続蝦夷草紙」や「近藤巡夷録」なども著わしている。

1804年、長崎にロシア帝国のレザノフ使節が、皇帝の親書をもって通商(開港)を求めて来た。しかし、幕府は半年以上待たせたあげく親書の受け取りを拒否した。このような無礼な対応をすれば、二度とこないであろうとの安易な考えからであった。この対応にレザノフは激怒、1806年ロシア側は2隻の軍艦で樺太の日本人施設を襲い、そして利尻島、択捉島にも施設の破壊と略奪を重ねた。これに対し幕府は、軍艦ディアナ号のゴローニン艦長を捕縛連行した。ロシア側はその報復として船舶を襲い、積み荷や武器などを奪った。この船舶に乗船していた高田屋嘉兵衛らが重要参考人としてカムチャッカに連行された。このような情勢から重蔵は、再び蝦夷地御用を命じられ蝦夷地に派遣されることとなった。

軍艦ディアナ号・リコルド副艦長の元で捕虜の身である嘉兵衛は、ロシア語を覚え、なぜ連行されたのかその経緯を聞き、両国間の交渉役となり、ゴローニン艦長と嘉兵衛らの身柄交換に至ったのである。(未完)